

身近なまちの風景物語(32)

見え透く文様

駅や観光拠点周辺の歩道では、舗装にタイルが敷かれることが多い。

クッション性が良いと軽快な足取りになる。一方、雨や雪の日に足を滑らせることもあれば、自転車のタイヤがタイルの凹凸にとられてバランスを崩すこともある。

歩道では耐久性や耐候性などのある舗装用床タイルを敷き並べる。もちろん安全性も必要だ。歩道の幅、長さ、通行量、沿道の状況などから、タイルの大きさ、形状、材質、色彩などを検討するが、大事なものは文様である。

タイルの並べ方によって文様が生まれる。この文様のデザインをどうするか。意図が必要だ。その意図に沿ったタイルと並べ方を決めていく。

地域に由来のある人物や動植物などが色の異なるタイルを組み合わせで描かれることもあるが、多くは幾何学模様のパターンになる。

俄かにはその意図が読み取れない文様もあるが、適当に並べていることはなく、意図はあるはずだ。特別な意味を持たない文様を見ると、寂しくなる。

日本には古くから織物や陶磁器などで使用されている文様がある。時として、この伝統文様を活かした幾何学模様になっていることもある。地域に特色のある伝統産業や工芸があれば、そこで使用されている文様を取り入れることができる。

上田城(長野県)に向かう歩道は、それまで見たことのない文様だった。これは何か意図があるなと思った時、ふと傍にある説明板が目に入った。真田紐を意識したタイルの並べ方だった。なるほど。

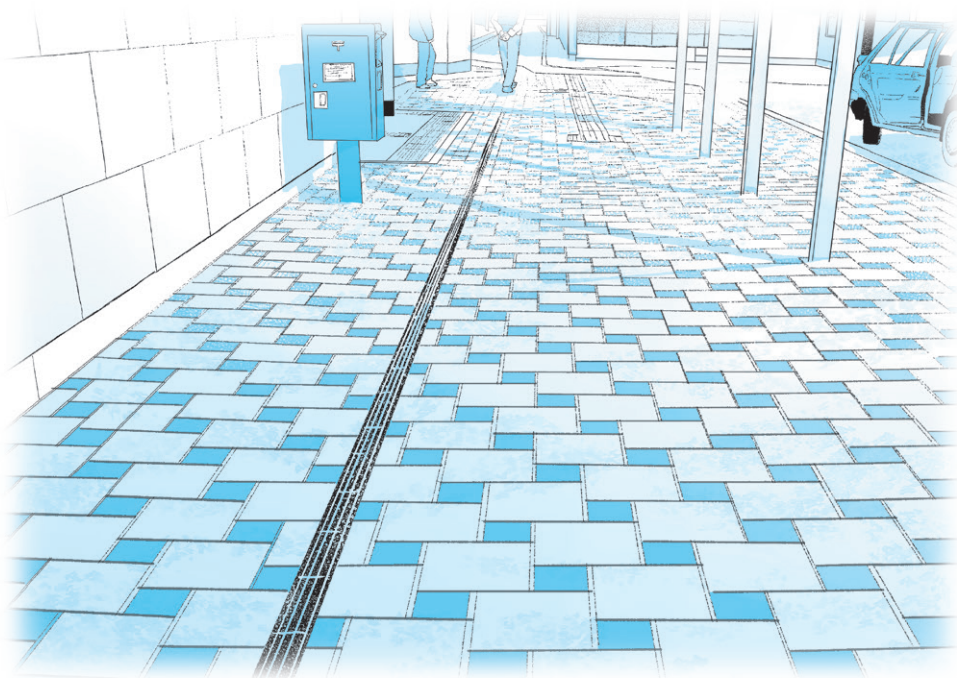
結城駅前の歩道の文様はどうだろう。すぐに結城紬を連想した。織物の文様だ。

結城紬の制作工程のほとんどが手作業であり、その工程は重要無形文化財に指定され、2010年にはユネスコの無形文化遺産にも登録された。この高級絹織物は、結城の象徴である。

舗装タイルの並べ方でもまちの個性を表現することができる。侮れない。デザインの意図を発見すると、頭も足取りも軽くなる。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学大学院博士前期課程1年）